

佐伯独歩会会報

発行責任者
古川 敬

今、独歩を読むということ

元 国士舘大学教授 中島礼子

独歩といえば「武蔵野」が挙げられる。それは挙げられるだけの理由があるからだ。既に失われた自然が息づいているということだけでなく、そこには理想的な生活と自然との調和が見られるからである。独歩は「武蔵野」において、一貫して、平地林・野（畑）・路・農家など、その総体である武蔵野について、生活の場としての自然を評価している。独歩は、通常、人々が見過ごしてしまふ「己を囲む自然、自らが住む自然」の美、すなわち、生活の場としての自然の即自的な美を描き出して見せた。今日、なおも多くの人々を惹きつけて止まない理由は「武蔵野」には人間の本来的な自然との関係のありようが描かれているということにあるといえよう。

「其描く人物は山中一軒家に住む無学な樵夫でも可い。裏店に住む熊公八公でも可い、此等の人物は天地玄妙の理なぞ知るわけがない、宇宙観も人生観も有つたものではない、たゞ社会の尤も平凡たる一員たるに過ぎない、但し若し之をしも描くべく詩料とするの価値があるならば、矢張り之を描くに天地間に其生を托する哀々たる一生涯として之を観なければならぬ。」

私は、この中の「天地間に其生を托する哀々たる一生涯として観」ということ、そこに魅せられたのである。独歩によって、私は人を肩書きやお金のあるなしや美醜ではなく、生命あるものとしてみるということを学んだ。私は独歩の小説を通して多くの人々にそれを感得していただくことを望んで

お詫び

中島礼子先生に「百十回独歩忌にあたり、今、独歩を読むことの意義を述べたい」と原稿依頼をいたしましたので、前後省略させていただきます。会員の方には全文を印刷してお届けいたします。



り変わり、グローバル化の波が押し寄せ、格差社会が拡大し、今や高齢者のみならず若者の貧困が問題とされる時代になった。そのようななかで、一貫して貧困の問題を扱ってきた独歩の小説には、今日の貧困の問題とも通底するものがある。

独歩には貧困を具体的に作品化したものとして、「源叔父」（「文芸倶楽部」一八九七・八）の乞食、「二少女」（「国民之友」一八九八・七）の孤児、「少年の悲哀」（「小天地」一九〇二・八）の孤児、「窮死」（「文芸倶楽部」一九〇七・六）の孤児・土方・立ちん坊・車夫などがある。「二少女」「少年の悲哀」は孤児ゆえに貧困に陥り、妾の話が持ち上がった。あるいは娼婦にならざるを得なかったり、弟が行方不明になったりと貧困と女性における性の商品化が連動している。独歩は「窮死」において、貧困の問題の総決算であるかのように、文公にこれらを一身に具現化した。「窮死」は、明治時代の福祉政策、すなわち地域における相互扶助に重きを置く恤救規則への大いなる批判が込められた小説である。今日の福祉政策もしいに同様な傾向を持ちつつある。今日もなお「窮死」が古びない理由をそこに見出すことができよう。

また、独歩の小説は一貫して社会改良、社会への抗議・批判、時代を撃つものになっている。私は独歩の「窮死」を読んで、ここで描かれているのは、今日の時代であり、遠い明治の時代から何ほども変わっていないのではないかという思いを強くした。以前は一億総中流化と称し、まじめに働けば人間としての最低生活はおろか、そこそこ豊かな暮らしができると思われていた時代があった。時は移

第110回独歩忌

今年六月二十三日は、第百十回の独歩忌にあたる。いままでは、国木田独歩館で夕方独歩忌を行ってきたが、今年は節目の独歩忌になるので多くの方に参加してもらい、独歩忌を開催しようと考えた。

独歩忌の内容は、第一部は独歩と同時の人の曲の演奏をおこない、第二部は講演を行うことにした。第一部の演奏は、大分笛の会のメンバーにバッハの「小フーガ」で厳粛に始めてもらい、二曲目はドルザークの「スラブ舞曲」、ドルザークは、場所とは違えど、独歩と同時代に生きた人である。彼の「新世界」は、いままでの音楽から抜け出し、新鮮さを感じさせる。日本でも演奏されたのは、一九六一年、小澤征爾氏によってはじめて演奏されたという日本人には比較的新しい曲である。最後は「さくら」を演奏してもらおう。次に西谷英恵さんに「雀の子」を歌唱してもらおう。この曲は、シューベルトの菩提樹を替え歌である。日本が西洋音楽の受容期に、このような替え歌により受け入れやすくと考えた結果であろう。最後には滝廉太郎の「荒城の月」を歌ってもらおう。

講演は小野正嗣先生の「文学の楽しみ」という演題で語っていただく。忙しい中、都合をつけていただき、光栄でした。

とき 平成三十年六月二十四日（日）十四時開演
ところ 佐伯文化会館中ホール

その他 整理券必要 会員の方には整理券を郵送します。参加可能席 二百五十席 理券設置所 佐伯市役所 教育委員会 文化会館などを予定

鹿狩「の舞心」を訪ねて

ことや独歩文学にとつての佐伯の意義などを

十一月十九日（日）国木田独歩の文学作品「鹿狩」の舞台である鶴見半島を巡る佐伯独歩会の秋の遠行をおこなった。計画では、独歩たちが鹿狩りをおこなった行程をたどるために船でのいききを考えていたが、船営業者は冬の海は波が荒いので、着岸が困難であるとの理由で運行ができなため、陸からマイクロバスをチャーターして行った。

十時に佐伯文化会館下駐車場を出発した。初参加の方が多いので、国木田独歩がなぜ佐伯に来たのか、どの程度佐伯に滞在したのか、どのような所を巡ったのかの質問に答え、たった十ヶ月の間に佐伯の美しい自然を訪ねて回った



当地では、地区で育つたAさんに独歩の鹿狩りについて説明してもらった。Aさんの説明では、十二月に葛港を出港し、船は滑るように運行できたと書かれているので、天候がよく順調な航海だったのではないかと思われるのか、「鹿狩」作品には「さの字」の港とあるので、猿戸にいたのではないかと考えられるなど簡単に説明していただき、風が強いので、間越の峠で風を避けて、この先の鶴見半島が鹿狩りを行った場所であると思われるかと解説してもらった。

猿戸だけを見て帰るのはもったいないので、「はぎこネイチャーセンター」を訪ね、ウミガメの飼育や現在行っている研究などを紹介してもらった。

松浦に行く途中に島江地区の坂道から鶴見スカイラインに上がり、鹿狩りでも見られたシシガキを見学した。独歩は鹿狩りをした後、鶴見半島の尾根をたどり、浦代に抜けて、帰ったようである



が、今は木々が生い茂り、道がわかりにくいのではと思われるが、Aさんの話では、昔の地区の人は山に入り、火力を確保するために、雑木林の木々を伐採する仕事を日常おこなっていたので、尾根の道がはつきりとしていたのであることを説明してくれた。鶴見半島の至る所に動物の作物被害を避けるためにシシガキを設置しているが、このシシガキも鹿狩りに利用しているようだった。

講演は小野正嗣先生の「文学の楽しみ」という演題で語っていただく。忙しい中、都合をつけていただき、光栄でした。

「源をぢ」の探求

古市 木村一郎

国木田独歩の短編小説「源をぢ」は、明治三十年、日光照尊院に田山花袋と寄寓し脱稿、「文芸倶楽部」に発表された。上、中、下で構成され、その書き出しは「都より一人の年若き教師下り来りて、佐伯の子弟に語学教しふること殆ど一年、秋の中頃来りて夏の中ごろ去りぬ。夏の初め、かれは城下に住むことを厭いて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ、ここより校舎に通いたり。」である。独歩は鶴谷学館の教師として明治二十六年九月三十日佐伯葛港に着き、やがて、鶴谷学館館長の坂本永年氏の二階に寄寓している。明治二十六年二月三日から起稿した日記「欺かざるの記」は詳細な生活の記録として「源をぢ」以下一連の名作を生んでいる。

城下にある坂本家に約九か月住んだのち、明治二十七年七月一日には葛港の鎌田旅人宿の鎌田清作氏方に転居。同年七月二十二日鎌田夫婦から「源をぢ」に当たる人物の、身の上話を聞いてい

る。その人物像について佐伯鶴城高校にも在職された、小野茂樹氏著の「若き日の国木田独歩」によれば、妙見社の登山口で渡船業（おろし）を営んでいた、高原嘉次郎説（嘉次郎明治二十七年五十一才、その妻ユメ明治二十二年死亡、その子亀太郎明治十二年海で溺死。）とされている。

最近、坂本家の末裔の格氏と鶴谷学館近くの広辻に出没した紀州と呼ぶ乞食の墓を訪ねてみた。墓石には紀州の墓、野嶋松之助明治四十年（1907）一月三十一日池船橋にて没す。享年三十三歳とあり明治七年（1874）が生年月日と推計される。小説中段に登場する紀州は、幸助海に溺れて失せし（十二歳）同じ年の秋、女乞食日向の方より迷い来て佐伯の町に足を留めぬ。伴ひしは八歳ばかりの男の子なり。したがって幸助十歳、紀州八歳とその差四歳である。幸助の生年月日は明治三年（1870年）死亡時は明治十五年となる。小説による源太郎結婚時は二十八、九歳、妻百合小娘（十六歳ぐら

い）の差十三歳となる。百合が仮に十八歳の時幸助を出産し、幸助七歳の時、二児出産時に二十五歳で死亡、百合の生年月日嘉永五年（1852年）となる。源太郎は天保十年（1839）、紀州との差三十五年、明治二十七年（1894）

では五十五歳と思える。小説の源をぢは、上、中、下を通じて渡船業である。中、下に登場する源をぢは、紀州との互いに薄幸の取り合

わせであり、紀州を取り巻く佐伯町民や、広辻付近に居住する木村家族（佐伯村六百四十七番地）、そして独歩自身も柿を与えるなど、紀州に接する生活態度を観察して小説化したものと思える。なお、源太郎、百合の年齢差十三歳、茂の父辰蔵（明治二十二年九十三歳）九十八（九青山村村長）と母エイの年齢差十三歳、幸助と茂はともに十二歳。エイは明治二十七年時三十二歳。美しくありし。生徒の祖父源左エ門を「源をぢ」とし、木村一家の紀州との関わりや、年齢構成を小説に生かしたと考

えるのは手前味噌でしょう。なお、姓の「池田」は、私の全くの憶測であるが、合併前の池田村や鶴谷学館近くの池田川に架かる池田橋（現水が谷橋）から採用したのではなからうかと思われま

す。佐伯市民として資料を提供し、国木田独歩研究者の方々のご意見を伺いたいと存じます。

茅ヶ崎市は四月十四日より九月三十日まで全国の独歩碑の写真展示を行い、六月二十三日の独歩忌には中島礼子先生の講演を行うように計画している。

そのため、佐伯市にある独歩関連碑を撮影し、茅ヶ崎市の楠さんへと郵送した。佐伯市は、独歩関連碑が一番多くある場所であり、それだけ独歩の文学を愛していることがわかる。

国木田独歩没後110年茅ヶ崎市実行委員会の楠正昭さんより、電話をいただき、「今年は、独歩の110回忌になり、茅ヶ崎市において独歩忌を行いたい。」というお話を伺った。このようなことが生じたのは、佐伯独歩会がホームページを立ち上げていたからであり、佐伯独歩会の活動が一番行っているというの

がわかったからだという。できれば交流を行っていききたいとの依頼を受けた。

茅ヶ崎市との交流

「源をぢ」は、明治三十年、日光照尊院に田山花袋と寄寓し脱稿、「文芸倶楽部」に発表された。上、中、下で構成され、その書き出しは「都より一人の年若き教師下り来りて、佐伯の子弟に語学教しふること殆ど一年、秋の中頃来りて夏の中ごろ去りぬ。夏の初め、かれは城下に住むことを厭いて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ、ここより校舎に通いたり。」である。独歩は鶴谷学館の教師として明治二十六年九月三十日佐伯葛港に着き、やがて、鶴谷学館館長の坂本永年氏の二階に寄寓している。明治二十六年二月三日から起稿した日記「欺かざるの記」は詳細な生活の記録として「源をぢ」以下一連の名作を生んでいる。

城下にある坂本家に約九か月住んだのち、明治二十七年七月一日には葛港の鎌田旅人宿の鎌田清作氏方に転居。同年七月二十二日鎌田夫婦から「源をぢ」に当たる人物の、身の上話を聞いてい

る。その人物像について佐伯鶴城高校にも在職された、小野茂樹氏著の「若き日の国木田独歩」によれば、妙見社の登山口で渡船業（おろし）を営んでいた、高原嘉次郎説（嘉次郎明治二十七年五十一才、その妻ユメ明治二十二年死亡、その子亀太郎明治十二年海で溺死。）とされている。

最近、坂本家の末裔の格氏と鶴谷学館近くの広辻に出没した紀州と呼ぶ乞食の墓を訪ねてみた。墓石には紀州の墓、野嶋松之助明治四十年（1907）一月三十一日池船橋にて没す。享年三十三歳とあり明治七年（1874）が生年月日と推計される。小説中段に登場する紀州は、幸助海に溺れて失せし（十二歳）同じ年の秋、女乞食日向の方より迷い来て佐伯の町に足を留めぬ。伴ひしは八歳ばかりの男の子なり。したがって幸助十歳、紀州八歳とその差四歳である。幸助の生年月日は明治三年（1870年）死亡時は明治十五年となる。小説による源太郎結婚時は二十八、九歳、妻百合小娘（十六歳ぐら

い）の差十三歳となる。百合が仮に十八歳の時幸助を出産し、幸助七歳の時、二児出産時に二十五歳で死亡、百合の生年月日嘉永五年（1852年）となる。源太郎は天保十年（1839）、紀州との差三十五年、明治二十七年（1894）

では五十五歳と思える。小説の源をぢは、上、中、下を通じて渡船業である。中、下に登場する源をぢは、紀州との互いに薄幸の取り合

わせであり、紀州を取り巻く佐伯町民や、広辻付近に居住する木村家族（佐伯村六百四十七番地）、そして独歩自身も柿を与えるなど、紀州に接する生活態度を観察して小説化したものと思える。なお、源太郎、百合の年齢差十三歳、茂の父辰蔵（明治二十二年九十三歳）九十八（九青山村村長）と母エイの年齢差十三歳、幸助と茂はともに十二歳。エイは明治二十七年時三十二歳。美しくありし。生徒の祖父源左エ門を「源をぢ」とし、木村一家の紀州との関わりや、年齢構成を小説に生かしたと考

えるのは手前味噌でしょう。なお、姓の「池田」は、私の全くの憶測であるが、合併前の池田村や鶴谷学館近くの池田川に架かる池田橋（現水が谷橋）から採用したのではなからうかと思われま

す。佐伯市民として資料を提供し、国木田独歩研究者の方々のご意見を伺いたいと存じます。

独歩会会長賞受賞の堀口君の「独歩に、もう一度」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」

「もう一度、独歩に会いたい。」



フルート独奏と朗読による第109回独歩忌

六月二十三日（金）十八・三十より第百九回独歩忌を開催しました。今年の独歩忌を開催するまでに顧問の中島礼子先生のアドバイスを仰ぐことができ、難解な独歩の文章の読み方を教えていただきました。その中島先生が当日参加されることになったので、開会の挨拶の後、先生から一言挨拶をしていただきました。

また、今回は古川会長が体調の関係で参加できませんでしたが、大野副会長が過去、独歩の終焉の地である南湖院を訪れた時の様子を語った。来賓あいさつとして、土崎教育長が独歩と佐伯の関わりについて語った。

今回の独歩忌は、独歩作品の朗読とフルート演奏による第109回独歩忌とした。

独歩作品は、独歩が佐伯を去ってから一年後に書かれた『豊後の国佐伯』から「城山」と「番匠川」、「元越山を登る記」を朗読し、国木田独歩と同時代の作曲家滝廉太郎の「花」「秋」の二曲を演奏した。

当日参加した方々は、「貴重な時間を過ごすことができた」「改めて佐伯の様子が生きたと想像することができた」「佐伯の良さを改めて見直した」などの声が聞かれた。朗読中にも、往時の佐伯の様子が朗読されていくにつれて、うんうんとうなずく姿がみられ、参加者は納得して視聴している姿が見られた。参加者数は四十五名で昨年よりは少し増加した。

朗読者は元BSアナウンサーの藤川和子さんの落ち着いた声と深い響きのある独歩の作品の朗読が、往時の佐伯の姿を浮かび上がらせてくれた。

